

「児童・生徒のバス通学は無料に」に共感の声 柿崎地区公民館での通学支援制度懇談会

日本共産党市議団主催の市民懇談会を5日、柿崎地区公民館で開催しました。市民懇談会は今回で7回目、テーマは通学支援制度の見直し問題です。柿崎区の会場には吉川区のPTA役員のみなさんをはじめ、大潟区、頸城区の地域協議会委員さんなど20数人が集まってください



柿崎地区公民館での懇談会の様子。立って説明しているのは上野公悦議員。(5日撮影)

ました。遠くは、牧区からも参加してください。遠くは、牧区からも参加して下さった方がありました。

合併前の14市町村の通学支援制度は、大きく分けて、民間バスを利用する場合に補助をするという方法とスクールバスを運行するという二通りでした。しかし、対象とする児童・生徒の通学距離、保護者の負担などは様々で、簡単には統一できない状況でした。それで、合併協議では、合併後5年間は現行通りとし、2009年度までに新基準を作成することで合意したのでした。市教委ではこの合併協議事項を踏まえ実務的な準備を進め、昨年の春からは保護者説明会の開催、アンケート調査などに取り組みできました。そして新基準案を保護者などに示し、再び保護者説明会、アンケートに取り組みんでいます。

市教委主催説明会についても注文

今回の懇談会では、上野議員がスライドを使ってこれまでの経過や党議員団の考えを説明し、その後、意見交換をさせてもらいました。私はこれまで、市教委の説明会に2回参加してきましたが、市教委の説明会以上に率直な意見や疑問が次々と出てきて、とても勉強になりました。

たとえば、合併協議での合意事項では、補助対象距離については、旧上越市が2校で実施していた「小学校3キロ以上、中学校5キロ以上」で統一することが書かれています。2つの学校でこうした補助が出るようになった背景、経過を教えてくださいという質問がありました。統一するものになったところについて詳しく知りたいというのは当然のことです。通学手

段について市教委は、民間バスが運行されるところは民間バス、運行されていないところは、または運行されていても利用が困難なところはスクールバスという方針案を示しています。しかし、実態としては、「冬はほとんど使えない」「使うようにすると部活が思うようにできない」などの問題点があることも出されました。市教委主催説明会の持ち方についても注文が相次ぎました。「参加しやすい時間帯にやっしてほしい」「説明資料は当日配布ではなく、事前配布を」「説明はもっとわかりやすく」等です。

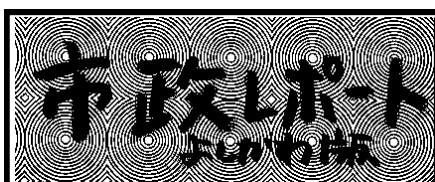
懇談会でどういう反応が出るか私が注目していたのは、「市教委の受益者負担論はおかしい。児童・生徒のバス通学は無料に」という私たちの主張についてでした。一部に負担はあってもいいという声がありましたが、何人もの保護者から「ぜひ実現してほしい。がんばってください」と激励され、喜んでいきます。「通学バス受益者負担論」には、「学校統廃合で市には十分『受益』があったはず。市の職員に一週間くらいバスに乗ってもらい、受益があるかどうか体験してほしい」との反論もありました。

この日の懇談会については何人もの市民から問い合わせがあり、「柿崎だけでなく、私たちのところでも開催してほしい」という要望も寄せられています。議員団で、今後の取り組みについて相談して対応していきたいと思えます。



【雪割草】雪割草が咲き始めました。例年よりもひと月も早い開花です。今年もドキドキするほどかわいい花を咲かせてくれました。群生地を訪ね、開花していたときの感動は最高です。

(区内の山間部にて8日撮影)



NO 1384
2009.2.15

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪法一
Tel 548-3628 (有線) 4867
E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp
URL <http://www.hose1.jp/>

「トキめき新潟国体」

盛り上げでトーク・交流

「トキめき新潟国体」を成功させるようと頑張っている市民と市長との「現場でトーク」が12日、柿崎ドームで行われました。国体まで226日とせまったこの日、参加したのは、市内で競技が実施される柿崎区、板倉区、安塚区、吉川区のまちづくり団体役員など約70人。上越市を訪れた人たちから喜んでいただける国体にするために、これまでの活動報告や意見交換を行いました。

国体は上越市にとって、今年度の大きな取り組みのひとつです。市内ではハンドボール（柿崎区・正式競技）、パラ・ハンドライダー（吉川区・デモンストレーション）など11種目が行われます。

国体を盛り上げようと頑張ってきた柿崎区の満田恵美子さんと清里区の横山文男さんの報告は参加者の心を打つものでした。

満田さんはこれまで取り組んできた花いっぱい運動やマスコット「トッキッキ」の制作・販売だけでなく、昭和39年の新潟国体での思い出も語り



ました。当時、柿崎町はテニスの町として有名で、国体のテニス競技の開催地に。宿泊施設が足りず、遠くから参加した選手には民家に泊まってもらい、その家の人たちが家族ぐるみで応援したと誇ります。今回のハン

ドボール競技でも、開催地となったことを誇りにできるよう頑張りたいと決意をのべました。

横山さんは、リハーサル大会で延べ10日間ほどボランティアとして関わった体験を生き生きと語りました。このなかで横山さんは、「駐車場係のところには食堂の場所から名所がどこにあるかまでなんでも問い合わせがくる。ボランティアと行政は情報を共有していくことが大事だ。駐車場の地図には番号をつけた方がいい」など秋の国体に向けた改善提案をいくつも語り、注目されました。とにかく、一生懸命でしたね。

休憩に入る前に、トランプビクス(画像)のインストラクターの指導で体をほぐす体操をしました。音楽に合わせて、手や足をたたいたり、体をひねったり。久しぶりの運動でしたが、インストラクターの笑顔にひかれて、最後までやれました。

音楽に合わせて体を動かすのは楽しいですね。

総務委では施設整備などで質疑

10日の市議会総務常任委員会では「トキめき新潟国体」について集中質疑が行われました。

市の国体局からリハーサル大会の結果、競技会場の整備計画などが報告された後の質疑では、ソフトボール会場のグラウンドコンディションについて質問が集中。「水はけの良いグラウンドに整備できないのか。整備できないなら、市内の中学校などの暗渠のあるグラウンドに移動して試合をした方が良いのではないか」などの声があがりました。

私はリハーサル大会での反省点・指摘事項にあった売店の出店要請などにどう対応するか質問しました。また、配布物などでの観客サービスの充実を求めました。

「まるで自分史のよう。希望がもてた」

法政大学のふたりの学生による論文発表会が旧川谷校体育館で7日、地域の人々や大学の仲間たちなど70人ほどの参加のもとで行われました(画像)。

学生は4年生の山岸拓さんと堀内しげみさん、「聞き書きによる農業と年中行事」というテーマで昭和30年代の川谷地区の農作業のことや行事などについてスライドを使って紹介しました。

聞き書きをしたふたりにとって30年代の山村の暮らしは驚きの連続だったようです。牛や馬が農家の一員として大事にあつかわれていたこと、田植えでは女性の方が植えるスピードが速いことなどを報告すると会場では、うなづく人が何人もいました。ふたりは、田んぼの畦にまで大豆が植えられていたなど、地域農業が「いい循環で回っていた」ことも知ります。また、地域の暮らしの中に「結い」がしっかりと根付いていて、支えあいの伝統があることも浮き彫りにしました。

明るい陽射しが体育館に差し込み、スクリーンはよく見えませんが、ふたりの心をこめた、丁寧な語りは会場に人たちの心をゆさぶりました。会場からは時々、拍手が起きたり、「本当のことだ」という声も出ました。発表後の感想を求められて石谷のSさんは、「自分史を聞かせていただいたような半日でした。希望が持てました」とのべましたが、地域の人たちはみんな同じ気持ちだったのではないのでしょうか。

山間部はどんどん高齢化が進んでいます。しかし、集落に入ってみれば、自然や農業を大切に、支えあいを重視した人間らしい暮らしの原点を見出すことができます。そこに焦点をあてたふたりに拍手を送ります。

